

『教育心理』1965年4月（日本文化科学社）

学力とは何か

——歴史的・社会的見方——

国立教育研究所第二研究室長 矢 口 新

【1】

きわめて概念的な言い方をすれば、学力というのは、経験を通じて身につけた能力という言い方ができるであろう。人間は生まれたときは、何もできないといってよいから、ある年齢に達して、そのときにいろいろなことができるようになっていくのは、これみな経験を通じて習得したものである。身につけたとか習得したというのは、心理学的に言えば学習したということであろう。

人間は生活する中で学習している。環境の中で何かをなして、行動して生きていっている。そのことが同時にいろいろなことを学習していることになっていく。生活の中で経験することがすべて学習となっていくとはかぎらない。けれども、とくに習いおぼえようとしなくても、知らず知らずの間に習得していることも多い。そういうことも広い意味では学力といってよいのである。それは経験を通じて学習した能力である。

教育ということばには、意図的・計画的なおおいがつきまつている。経験を通じて教育されるというような使い方はするけれども、一般的には教育するといえば、意図的なものをいう。人間が自然のままに放置されていても、学習していくという事実を自覚して、それを意図的営みとしたものが、われわれのもっている教育という営みである。それは、現代の社会では、大きな社会制度として確立するまでに至っている。

意図的・計画的にこれこれのことを習得させてやろうとする教育がはじまると、それには必然的に教育の中味についての選択が行なわれる。何ができることがたいせつなのかという価値的な見方がそこに働く。何が必要なものか、その必要なものを与えようとし、その必要なものを習得したものが教育された人間ということになってくる。

そういう意図的な教育が、社会の中で大きな力をもってくると、学力ということばも、学校のような意図的な教育の場所で習得したものを特にさすようになる。

人間の社会の長い歴史をみると、時代によって何が必要な教養であるか、どういうことを身につけていなくてはならないかということについて、ずいぶん、ちがった考え方をもっていることがわかる。また、同じ時代でも社会の階層によってちがっていることもある。たとえば、平安時代の貴族は、詩歌管絃がどうしても身につけていなくてはならぬことであった。だから当時は、学力ということばがあれば、詩歌に秀でた人は学力のある人といわれたであろう。当時、学力を測定することが行なわれていれば、詩歌についてどれだけ習得しているかを測定したことであろう。事実、いろいろな集会で、そういう詩歌の技が競われてもいたのである。いまのわれわれの生活からみれば、そういう感覚は理解できないようでもあるが、それが時代というものであろう。

もちろん、現代でも、ある意味で詩歌の技を競うということもある。宮中の歌会などはそのなごりであろ

うが、それが現代の学力の問題として正面きって問題にされることはない。しかし、平安時代の貴族にあっては、それが、現代の学力問題ほどに重要なことであったのである。学力の価値観というものがちがうというべきであろう。

しかし、その平安の時代にも、貴族ならざる一般庶民、とくに農民は詩歌の世界とは全然関係のない世界に住んでいた。そういう農民に必要なものは、もっと別な能力であった。もし、かれらが学力ということばを使用することができたら、まるで別な能力をその内容として考えたであろう。

しかし、当時の世界を政治的に支配した貴族の考え方以外に、われわれは、その時代の人びとの考え方を知るすべをもたない。もちろん、庶民も、政治の支配者たる貴族の思想の影響を受けていたであろう。いな思想としては、それが支配的であったかもしれない。そうだとすると、庶民も学力とは詩歌のことだと思っていたかもしれない。それにもかかわらず、実際の生活の知恵としては、もっとたいせつにしたものがあつたと思う。ただわれわれは、それを物いわぬ当時の庶民から聞き出すことができないのである。

このことから、われわれが教訓を得るのは、時代時代が、あるいは人間が、本当に必要とする学力というもの、軽々に考えるべきでないということである。物いわぬ農民の知恵も、また次つぎへと受けつがれて、われわれの現代の技術の基礎となっている。だから今われわれも、学力を考えると、何が学力として必要かということについては、単に時流に流されているだけではないであろう。本当に必要なものを見つけて、それをどうして習得させるかを静かに考える態度が必要であるということである。

時代が下って江戸の時代になると、そういう点でまた興味のある事実にふれる。庶民が社会の中で力をもってくると、庶民は、庶民とくに町人の生活の中から、新しい価値ある教養というものについての考え方を

くりあげてくる。武士が学んでいた儒学というものを、必ずしもたいせつなものとは思わなくなってくる。“町人は学問をしては身をほろぼす”などということも公然といわれているが、おもしろいことである。「浮世床」という小説を読むと、儒学くずれの若者がさんざんけなされているが、つまり、そういう古い学問では世の中の実生活には役だたないことを風刺しているのである。

学力ということばは使われていないけれども、かれらの学力観はまるでちがっているといってよい。武士の支配はやがてくずれて、町人の思想をもとにする世界が、日本にも出現することになるが、その以前において、すでに町人は新しい人間観、それにもとづく学力観をもっていたといってよい。

学力というものを問題にするとき、そのような幅の広い考え方から、人間の能力を問題にするのだという考え方をもつ必要があろう。学力を問題にするのは、そういう深い意味のある仕事をしているのだということ忘れてはならない。

【2】

現代の学力観をつくっているものは、明治以後の日本の社会の動向である。新しく世界関連の中にはいつて、新しい知識を導入して新しい社会をつくらねばならなかった。いわば後進国であったわが国が前進するためには、先進国に学ばなければならなかった。人間に必要なもの、たいせつなものは新知識であった。それを受け入れる、学びとることが学問ということばでよばれる。

教育という仕事の中で最もたいせつなことも、その新しい知識を学びとることであつた。先進国の人が知っていることを、われわれも知っているということがたいせつなことなのである。

明治になると、学力ということばはときどき使われているが、そういう新知識をもっているかどうかとい

うことなのである。しかし、それは素朴に使われていたものであって、学校で教えたことをおぼえているかどうかは学業成績であった。学力はそれと全く同じ意味に使われている。

こうして学力ということばは、学校という教育の場で使われることばになってきて、一般的な意味はしだいにうすらいできたのであった。はじめにいったように、習得した能力という意味なら、きわめて幅広いのであるが、だんだん学校の中でのこととしてのみ考えられるようになってきたのである。このことは、学力というものを限定したものとして取り扱い、その中で、その構造や、その把握のしかたなどを精密にすることに役だっている。しかし同時に、幅広く、社会が要求するもの、本当に必要な生活の知恵としての学力は何か、ということさをさがす道がとざされる傾向を生み出す。こうして現在に至ったのである。

学力ということばが、だんだん多く使われるようになるのは、大正の末から昭和へかけて、教育測定ということがいわれ出してからである。つまり、学力の測定ということが問題になってくるのである。より精細に把握しようというような考え方が出てきたのである。

そこでは、学力の価値観などはあまり問題にならないといってもよい。それはもはや、学校で教育することの中にきまっている。学力とは何かということを、社会的な生活の能力の面から問題にしようというのではない。それはもうきまったことだという前提があるといってもよい。そう明確に自覚していたのではないが、どららかといえばそうである。算術の能力検査とか、読み方の能力検査とかいうものが、しだいに行なわれるようになったのがこのころである。

学力論議が最もやかましくなったのは、戦後である。その発端は学力低下論である。戦後の混乱が教師の質の低下をよび、生徒の学力低下を招いたということもあったであろう。混乱から立ち直る過程において、学力が低下しているのではないかという論が生まれたの

も当然である。また一方、戦後の教育の方針の変化によって、これまでにない教育内容が出てきた。たとえば、ディスカッションとか、あるいは学校外の社会にとび出して、いろいろ調査をするとか、学校の中でも自治活動を行なうとか、そういったことである。いわゆる民主的社会の生活者としての活動能力を育てるといったことである。そして、そういう点の教育が目だってくると、古くから伝統をもっていたものが弱くなってくる。そういう点から学力が低下したのではないかという論も起こってくる。

こういうふんい気で起こってきた学力論議は、一つは学力価値論へと発展し、いったい学力とは何であるかという研究へ進む。何がたいせつなのかということになる。もう一つは、学力の実態を把握しようという方向である。何がたいせつな学力かはともかくとして、学力というものがどの程度なのか、何がどれぐらいできるのかという方向の研究である。この研究は、さらにその学力といわれるものの条件の研究へと進む。いわゆる学力調査ブームがこうして起こってきた。

これらの研究も実は相互に関連がある。学力の実態を把握するといっても、必要な学力とは何かを問題にしないわけにはいかない。必要な学力といってもただ観念的に論ずるわけにはいかない。そこに必然的に関連が生ずる。しかし全体としてみると、学力を調査するというのが、ペーパー方式に限られていることもあって、傾向としては伝統的な学力観に支配されているといってもよい。そこにさまざまな問題も起こっているのである。

【3】

学力という概念はあっても、さて実際にそういうものをとらえることができるかということ、実際には、その片鱗というか、断片しかとらえられない。学力というものは、つかまえられるのである。社会科の学力、算数の学力といっても、それもとらえているかどうか

わからない。実際につかまえているのは、ある問題を出して、それに対する反応をしらべているだけである。概念はきわめて包括的であるが、現実につかまえたものはその一端にすぎない。人間の能力をそう簡単におさえることはできないのが当然であるともいえる。

しかし、その点をわれわれはすぐ忘れてしまう。ある方法で、ある限界をおいてとらえたものを、学力ということばを使って論じているうちに、学力の全部を論じているかのごとき錯覚をもつ。

そうすると、テストが人間の学力の考え方を支配する結果ともなる。テストができることが学力があるということにもなる。テストという方式もまた、われわれの長い教育の営みの中で次第につくられてきたものであるが、それもこれまでの教育についての考え方を反映している。つまり、新しい知識をおぼえているかどうかを調べる方法としての性格を強くもっている。そうすると、テストを中心として学力を考えることは、教育の注入主義をますます助長する結果にもなる。

われわれが長い間維持してきた教育観は、さきに述べたように、新知識の受け入れであった。それをおぼえておくことが学力を身につけることであった。「わかったか、おぼえておけ」というのは一番よく使われることばである。それはますます知識の注入主義を生み出す。こうして、あらゆる知識が教科書にもられ、それをおぼえているかどうかテストされ、そうして学力があるとかないとかいわれてくる状態は、人間の能力を育てるという点からみると、きわめて危険な現象である。

そういう知識をおぼえていることが、学力があることでなく、「何かができる」ことが学力ではないのか。人の話がわかり、本がわかることがたいせつなのでなく、まして、おぼえていることがたいせつなのでなく、人の話がわかる基礎として、その人の考え方を自分でできることがたいせつである。

「できる」ということから学力を考えなおすこと、そうして、何ができることがたいせつかを、もう一度社会的に考えなおすこと、これが学力の課題であろう。